



沖縄県立博物館創立30周年記念式典

創立30年にあたって

館長 外間正幸

当館は、昭和51年4月24日に創立30年を迎えました。当館の歩んだ30年の道は、今から思えばけっして平坦な道ではありませんでした。終戦直後、戦災の焦土のなかから文化財の残欠を収集発掘し、瓦葺の民家を借りうけ、あるいはトタン葺の小さな建物を作って、展示公開したのが当館の始まりです。これらの展示品は、残欠とはいえ、かつて文化国として栄えた沖縄の姿をしのばせるものであり、沖縄の復興を支える心の糧ともなるもので、虚脱状態にあった当時の県民に自信と誇りと希望を与えることができたのです。終戦直後の混乱のなかで、そのことをいち早く洞察し、散逸を恐れて文化財の収集にあたった方々、そして影になり日向になりして当館のために御尽力くださった

多くの方々に、あらためて心からの敬意と感謝の意を表したいと思います。

30年の間には、おかげさまで、敷地・建物の整備、資料の充実、展示等の諸活動の発展と、当館も大きく前進いたしました。30年の歩みをふり返って感慨を新たにすると同時に、当館の役割の重さを思い、身がひきしまる思いです。よりよき博物館にするよう職員が一丸となって奮闘する所存ですので今後ともよろしく願いいたします。

今年度から、館の諸活動の報告と予告を目的として「沖縄県立博物館だより」を発行することになりました。博物館活動に対する一助となることを願ってやみません。

創立30周年記念行事催される

*記念式典

昭和51年の4月26日午後2時から、博物館講堂で30周年記念式典が催されました。当日は、米賓の屋良朝苗県知事（代理）、知花英夫県議会議長をはじめとして100名近い出席者がありました。

社会教育課の花城朝勇課長による開式のことばに続いて、外間正幸館長による報告、仲宗根繁教育長のあいさつがありました。ひき続き、館長として功績のあった大嶺薫、豊平良顕、原田貞吉、山里永吉、金城増太郎、大城知善の各氏に、県教育委員会の瑞慶賀朝牛委員長より感謝状と記念品が贈られました。また、20年以上の長期にわたって博物館に勤務した野崎真美、与儀ウシの両氏と、創設当初家屋や屋敷を提供して下さった平良栄徳、与儀敏子の両氏に対して外間館長から感謝状と記念品が贈呈されました。その後米賓の祝辞等があつて式典を終りました。

式典終了後第2室でレセプションが行われました。

*沖縄県立博物館30年の歩み展

12月4日から19日までの16日間、記念行事の一環として、“沖縄県立博物館30年の歩み展”が第2室で開かれました。

当館の前身は、石川市東恩納にあった「東恩納博物館」になります。これは、1945年に米国海軍軍政府によって創設された「沖縄陳列館」を、1946年に当時の沖縄民政府が引き継いだものです。東恩納博物館は1953年には、1946年創立の「首里市立郷土博物館」を引き継いだ「首里博物館」と合併し、首里の龍潭池畔に移りました。これが1955年には「琉球政府立博物館」と名称を変更し、さらに1966年には尚家跡に移転、そして1972年には日本復帰に伴って「沖縄県立博物館」に改称したのです。

このように名称の変更や合併、移転などがくり返されたのは、戦後の沖縄の特殊事情を反映したものとといえましょう。それは収集品を見てもよくわかります。はじめの頃の収集品のほとんどは破損していたり、弾痕を残していたりで、完全品は

多くありません。その後、戦前本土に渡った文化財の収集・購入にも力を入れ、次第に資料も充実するようになってきたのです。

この展示会では、終戦直後の混乱期から今日に至るまでの館の変遷をたどりながら、館の業務、教育普及活動、文化財の修理、将来構想などの紹介も含めて系統的に展示を行ないました。



*主な出品資料

<廃墟の中から>

- 円覚寺の仏像残欠
- 世持橋石欄羽目残欠
- 護国寺扁額残欠
- 浦添ようどれ石碑残欠

<東恩納博物館時代>

- 金環園扁額
- 現代史編纂資料（文書）

<首里博物館時代>

- 沖縄郷土博物館（看板）
- 平ケース
- 円覚寺鳳凰透彫仏間引戸

<琉球政府立博物館時代>

- 琉球政府立博物館（看板）
- 米国返還の文化財（おもろさうし、混効験集等の複写本）
- 館名碑（謝花雲石書）
- ホール緞帳原画（安谷屋正義作）
- 新館落成記念切手
- 拓本「中山第一」（徐葆光書）

<沖縄県立博物館>

- 沖縄県立博物館（看板）
- 冊封使行列図（文化財修理の例）
- 竹虎の図（作者不詳）
- 赤絵碗（19世紀、壺屋焼）
- 中山世鑑（米国返還、県指定）
- 中山世譜（米国返還、県指定）
- 沈金食籠（嘉手納将校夫人クラブ寄贈）
- 三

味線「江戸与那」（県指定） ○龍頭観音像（田名宗経作、向井文忠氏寄贈） ○聞得大君使用雲龍黄金簪（米国返還、県指定） ○朱塗手焙（19世紀初期、東恩納寛博氏寄贈） ○堆錦文庫（村井順氏寄贈） ○館編集、発行の絵はがき、案内、ポスター、館報、カタログ、紀要の類。

* 沖縄県立博物館創立30周年記念講演会

12月4日、記念展と日を合わせて、記念講演会も開かれました。

当館は、当初美術工芸品を主とした博物館でしたが、次第に民俗・考古、歴史資料も充実してきました。そして現在では、自然史部門も含めた総合博物館を目指しております。そこで、記念講演会の内容は、沖縄の自然と人文について一題づつ、ということになり、人選を進めました。その結果、琉球大学教授の池原貞雄先生に「特殊動物に見る沖縄の自然」、同じく琉球大学教授の友寄英一郎先生に「琉球史と地理学、考古学との接点」と題して講演をしていただくことになりました。

当日は講堂を会場として、午後2時45分から池原先生、4時10分から友寄先生にそれぞれ1時間20分程度の講演をしていただきました。聴講者は80名近く集まり、メモをとりながら熱心に話を聞いておりました。

池原貞雄先生の講演要旨

沖縄県に棲息している動物の種類、分布、生態などには、日本の他の地方に見られない特異性が認められるが、これは沖縄の自然の特性を反映したものと考えられる。それは、国指定の天然記念物に指定された動物数が全国で2位であることを見てもわかる。

特殊動物から見た沖縄の自然の特性は5つほどあげられる。①特殊動物の類縁のものが熱帯地方に多いことからして、熱帯的要素の多い自然的特性を持っている。②特殊動物が多く部門にわたっている。いうことは、多様な自然環境を保持していることを示す。③島によって産する特定動物が異なっているということは、島ごとに成因や自然環境が異なっていることを表わしている。

④陸上動物に原始的な動物が多いのは、陸域が多く島の島に分かれ、特徴的な島嶼生態系を構成していることによる。⑤大規模なサンゴ礁生物群集が

存在していることから、海域環境が特殊な様相をそなえている。

ところが、沖縄の特色ある自然環境も、近年とみに大規模化した人間活動により、急速に変貌しつつある。このような状況のなかで、自然史科学に対する県民の知識の向上をはかり、自然を愛し、自然に親しみ、これを保全していく豊かな人間性を育てていくことが必要である。それとあわせて、失われゆく自然に関する資料を収集保管し、調査研究、教育普及活動を行なう「自然史博物館」の早急な設立を切望してやまない。



講演中の池原貞雄先生

友寄英一郎先生の講演要旨

世界史は部分史の総和ではない。総合的な視野のもとに、全体の潮流、全体の構造を明確にすることが重要である。その意味で、世界史においては大をみて、小を捨てる態度が必要である。一方、歴史はキメ細かく検討されなければならない。よりキメ細かく検討された実証的地域史や国家史があつて初めて総合的歴史が構想されると思われる。それから、考古学、地理学、社会学など、歴史学の周縁の関連諸社会科学の研究成果を歴史学に採り入れることも重要である。そのうえで、歴史全体を貫く糸を捉えるべきだというのである。

このような観点から見て、沖縄の歴史研究は遅れているといわねばならない。沖縄の史書には「易性革命」の史観が見えるが、この古い史観の影響が残っていることがまずあげられる。次に沖縄の自然的条件の役割、意義をもっと歴史叙述の中にもめるべきである。台風、干ばつ、飢饉、その後必ずといっていいぐらい訪れる疫病などが琉球史に与えた影響についてももっとくわしい叙述がなされるべきである。それから、最近の考古学の成果をもっと歴史研究にとり入れるようにし

なければならぬ。

沖縄の歴史研究はもっとキメ細かに、もっと多角的な視点から検討され、叙述されねばならないということである。

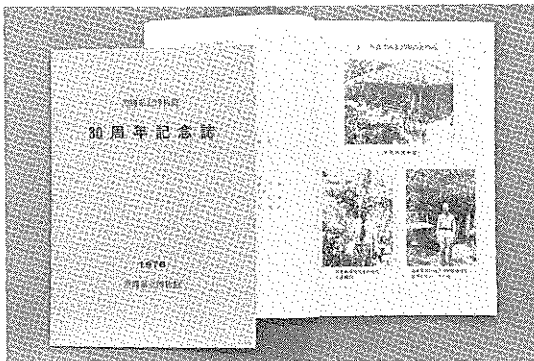


* 30周年記念誌の発刊

30周年記念事業の一環として、戦後の博物館のあゆみをまとめ、将来の発展に役立たせるために記念誌も出版されました。

記念誌のサイズは、A 5判54頁の小冊子で、黄土色を帯びたP・クロエスパルトの表紙が使われています。表紙裏には、県指定文化財の黒塗螺鈿遊雁絵大文庫の写真をのせ、博物館の記念にふさわしい装幀がなされています。

内容は「写真でみる30年のあゆみ」、「沿革」「博物館の充実・発展」、などを中心に、旧職員による「在職の思い出」などが収録されています。なお、同誌には去る4月24日に挙行された式典の式順や関係機関からよせられた祝辞、ならびに「30年の歩み展」に出品された展示品（一部）のリストも掲載されています。発行年月日 昭和51年12月4日。



今帰仁村渡喜仁浜原貝塚 発掘ニュース

去年の1月頃、京都大学で古生物を研究している河村善也氏が沖縄本島北部本部半島の先端・今帰仁村渡喜仁浜原の海に面した崖下を調査していました。字仲宗根にあるリゾートステーションから東側方向へ海岸沿いを歩いていると、500m 位行った所で母岩から大きな岩が崩れ落ち、その合間が谷状になっているところにぶつかりました。谷間に積もった土や石が雨のために地盤がゆるみ、そのまま地すべりしたようなところが眼にとまりました。注意深く見てみると、魚骨や貝が散乱しています。土器も数片採集されました。これが浜原貝塚発見の契機ですが、ここから得られた資料は博物館にもたらされました。

数日後、現地の状況を確認するため、博物館と今帰仁村教育委員会の合同調査が行なわれました。現地調査の結果、沖縄貝塚時代前期末から後期にまたがる、従来余り知られていない貴重な遺跡であることがわかりました。しかし、貝塚の大部分が崖上から落下するテッポウ水のため、崩壊ないしは流失してしまい、一部、のこされている包含層も危機にさらされていました。そこで崩れた部分から遺物を採集し、未崩壊部分にも試掘トレンチ（坑）を設けて遺跡の性格だけでも調査する必要を感じ緊急調査することになりました。



遺跡全景

調査は文化庁の緊急調査費の補助をうけて今帰仁村教育委員会が主体となり、県立博物館、沖縄国際大学考古学研究会OB・琉球大学考古学研究

会の共同参加によってすすめられました。調査期間は第一次調査を4月28日から5月13日までの16日間、第二次調査を8月3日から23日までの21日間の二回にわたって行われました。

第一次調査は、A地区と呼称した崖上の平坦面とその直下の僅かな平坦面、すなわち母岩から大きな岩がくずれ落ち、その裂目に土や石が詰まりやや平坦か傾斜状をなしている地形でB地区と呼称したところ、及びB地区の堆積土が雨により崩され、そのまま地すべりしたところでC地区と呼称したところの三カ所を発掘しました。調査の主力は、C地区からの遺物採集とB地区での文化様相の把握に注がれました。いうまでもなく、これらの調査をとおして、いつ頃この場所に人々が住みつき、どのような生活をしてきたかを知るためです。

崖上のA地区は、ここに住んだ人々の住居跡と想定するのに好適な場所と考えられたので試掘穴を4カ所に設けました。しかし、文化遺物は一片も検出されず、遺構らしきところも確認されませんでした。

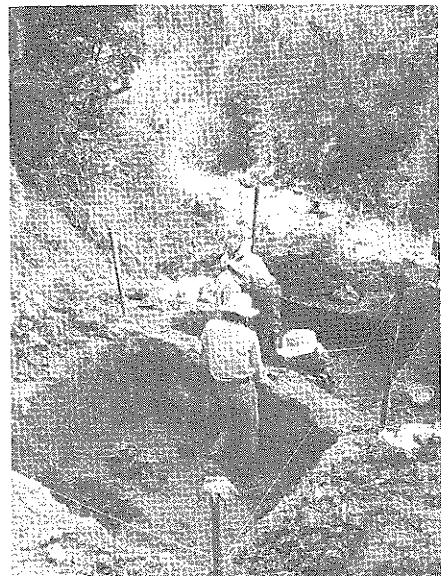
B地区は、前述したように裂目に堆積土がまったところですが、その堆積土の中に土器・石器・貝製品などの人工遺物や、イノシシなどの獣骨・魚貝類など食料に供された食べ滓などが混在していました。当時の貝塚人がものを捨てた場所で、いわゆる貝塚を形成しているところです。この貝塚の包含層の厚みは、試掘を行なったBa-3ピットで約4m確認されました。それより下は大きな石灰岩が埋り、発掘することはできませんでした。層序は大きく分けて4層、細分すると11層まで確認されました。文化層も大きく分けて上層と下層とに分離でき、さらに下層は二つの時期に区別できそうです。上層は沖縄貝塚時代後期(1200年～2000年前)の文化にぞくし、下層は中期の文化層(2000年～2500年前)が主体をなし、土器の様式からは、や、古い前期末葉的(2500年～2700年前)なものも検出されました。

上層の文化は層序的には第2層と把握されたところですが、そこから後期の最も特徴的な「くびれ平底無文鉢形土器」や「安山岩製石斧・砂岩製磨石」などが出土しました。自然遺物としては魚貝類の出土が夥しく、量的には最も多く、次いでイノシシの獣骨片などが検出されました。この後

期の時代は一般的に海への適応が発達し、生業も網漁が行われるなど技術的にすすんだ段階に到達していたと考えられています。これらをうらづけるものに網のおもりに使用されたと考えられている寶貝のおもりやシャコ貝製のおもりが出土していますが、本遺跡からは、これらの貝製おもりの他に網の縫い針用の骨針が出土しています。この骨針は、本遺跡で始めて出土した貴重なもので、当時の生業を物語る有力な資料です。

渡喜仁浜原貝塚からは遠く青海原に浮かぶ伊平屋、伊是名の島々が望見され、近くに手のとどきそうなところに古宇利島が見えます。古宇利島との間は遠浅が続き、干潮時には僅かな水路を越せば歩いていける距離にあります。また、沖の方には弧を描いたように干瀬が発達し、内側は格好な漁りの場所となっています。この遠浅と干瀬に囲まれたところが浜原貝塚人の経済活動の舞台となったところです。

貝塚から出土する貝の種類は豊富で、岩礁性の



発掘風景

ホラガイ、チョウセンサザエ、アンボンクロザメイモガイ、また砂浜に生息するイソハマグリ、アラスジケマンガイ、シャコガイなどです。魚類も種類が豊富でサンゴ礁に住む魚、岩礁に住む魚カニ・ウニ類など多種多様です。

山の幸も豊富だったとおもわれます。貝塚からはイノシシなどの獣骨片・鳥類の骨片などが出土しています。木の実や根菜なども食料に供された

とおもわれますが、その遺存体は検出することはできませんでした。

この上層の文化で注目したいことは、九州の弥生式土器が数片検出されたことです。弥生時代中期以降の土器とおもわれますが、すでにこの貝塚人も何らかの交渉があったものとおもわれます。

ところで、下層の文化は層序的には第3層の下半部から第4層にまたがる文化層ですが、この文化層からは、自然遺物の魚貝類が減少し遺物の主体は土器が占めていることです。この現象は、中期に位置づけられている他の遺跡の出土状況とも共通しており、興味ある問題を提起しています。土器は、中期の様式を代表するウザ浜式土器やカヤウチバンタ式土器が主体を占め、文様の手法では押捺刻文や二条平行線文土器もみられます。

C地区からは、海棲獣骨—おそらくジュゴンではなかろうかとおもわれますが—、形体的には野球のバットの下端部に類似した骨製品が出土しています。長さは15cm、直径8cmでよく磨研されています。一種の呪術具であろうかと推定されます。

第二次調査は、第一次調査で十分に把握できなかった土器形式の変化を層序のうえで検証することと、住居跡の確認等、生活面の追求に力が注がれました。併行して植物遺存体の検出作業も行いました。そのため、調査地区をB地区にしぼり、発掘可能な範囲で2m四方のグリッドを設けて調査しました。その結果、第一次調査で確認されなかった炉跡が三カ所で見つかると、B地区が浜原貝塚人の生活面ではなかろうかとおもわれました。

以上が浜原貝塚の発掘調査で得られた知見ですが、本遺跡周辺には東汲川貝塚や長根原遺跡など多くの遺跡が確認されています。この付近一帯は大きな広がりをもつ遺跡群で、今帰仁村の古代の生活や歴史を知るうえに重要な地域です。

激増する乱開発から皆で文化財を護り、祖先の遺した文化遺産を正しく活用しましょう。

(考古担当 新田重清)

博物館文化講座のお知らせ

2月26日(土) 午後2時30分～4時30分

身近な野草 高良拓夫氏(小緑高等学校教諭)

資料寄贈者御芳名(1)

- | | |
|-------------|--------------------------------------|
| 知念績三氏(那覇市) | 荒焼一合杓1点 |
| 當間 諭氏(那覇市) | 朱塗吸物椀1点 |
| 外村吉之助氏(倉敷市) | 三国通覧図説(琉球国)1点 |
| 那覇地方検察庁 | 厨子甕5点、塩壺1点、油甕1点 |
| 大城精徳氏(大里村) | 世持橋勾欄羽目拓本1点 |
| 外間尹成氏(知念村) | クルマボウ1点、アジン1点 |
| 中村ヨシ氏(那覇市) | 味噌甕1点、ジュラルミン製ヤカン1点、ジュラルミン製ハガマ1点、油壺1点 |
| 仲本勝男氏(浦添市) | 厨子甕1点 |
| 宮里仁徳氏(那覇市) | 厨子甕1点 |
| 政岡玄次氏(那覇市) | フジョウ1点 |
| 又吉政孝氏(那覇市) | サイ(釵)1点 |
| 城間山戸氏(那覇市) | 印鑑1点 |
| 白川島秋氏(知名町) | 木製折りたたみ式枕1点 |
| 島袋慶輔氏(那覇市) | 位牌1点 |
| 湖城進仁氏(大阪府) | 厨子甕1点 |
| 宮城米利氏(茨城県) | 厨子甕1点 |
| 安村 文氏(那覇市) | サギゾーキー1点 |
| 片岡禪教氏(那覇市) | 蚊張1点 |
| 長浜克彦氏(那覇市) | 切込用日本軍刀1点 |
| 宮平太郎氏(那覇市) | 歩兵銃1点 |
| 伊波ツル氏(那覇市) | 蓑2点 |
| 国吉多美子氏(東京都) | かんざし1点 |
| 當真嗣起氏(那覇市) | 魚化石1点 |
| 亀浜常久氏(平良市) | オオシャコ貝1点 |
| | 土器壺1点、ワンプー1点 |
| | 荒焼播鉢1点、磁器染付火取1点、餡油壺4点、からから1点 |

沖縄県立博物館だより No.1

発行年月日 昭和52年1月24日

編集・発行 沖縄県立博物館

〒903 沖縄県那覇市首里大中町1の1

TEL. 0988—32—2243

博物館蔵書



A02609801A